

Kakehashi いさはや

2023

Vol. **10**

令和5年11月発行



その人らしい
新たな暮らしに
向けて

その人らしい新たな暮らしに向けて

『その人らしく暮らす』ために、
 できることから新たな可能性を広げる“訪問リハビリテーション”
 今回は理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の3人の方にお話を伺いました

🎤 皆さんが関わる“訪問リハビリテーション”について教えてください。

本多：訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）は『その人が持っている機能を生活でいかに活かせるか』という視点で支援しています。

石本：『自宅で安全に過ごせる』というところから、だんだん『外に出る機会を作っていく』、地域に復帰できるように社会参加まで支援するのも訪問リハの役割ですね。

山田：ご家族との関係の中でコミュニケーションの取り方、食事をどういう場面で摂っているのか、直接その場に関われるということも大きいですね。

病院のように限られた期間ではなく、生活期から終末期まで、長い期間関わるということも訪問リハならではの点だと思います。

石本：寝たきりの方であっても最期の時まで、痛みの少ない寝方や姿勢を家族や介護者の方にお伝えして、本人・家族の負担を減らせるような関わりもしていますね。

本多：リハビリって頑張れば良くなるというイメージが強いけど、長い関わりの中でだんだん機能が落ちていく方もいて。それでも、生活の質は保つ、むしろ上げていくような関わりを持つというところが、訪問リハの難しいところでもあるし、奥深いところですね。

訪問リハビリテーション

その人が自分らしく暮らすために、それぞれの地域に出向いて、リハビリテーションの立場から行われる支援である。

その中で、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士は、健康状態を把握した上で、生活機能および背景因子を評価し、リハビリテーションの概念に基づいた、本人、家族等への直接的支援と関連職種への助言等の間接的支援を提供する。

日本訪問リハビリテーション協会
 ホームページより抜粋

石本：外に出よう、地域に戻ろうと支援していくわけですが、前向きになれない、まだ外に出る気持ちになれないという時の関わりが難しいですね。

本多：ご自分の障害や病気を受け入れられないまま退院してこられる方も多いので、その方の葛藤する場面に遭遇することはよくあります。自分自身の体と向き合う、『自分の健康状態』を受け入れていく時間は大事なもので、その時間にしっかり寄り添うようにしています。



理学療法士
本多 奨平 さん
訪問看護・
リハビリステーションあいのわ

理学療法士って??

本多: 理学療法士（以下、PT）は起きる・立つ・歩くというような“動作”に対するリハビリをします。例えば、歩行訓練。筋力強化や関節可動域を拡げる直接的な治療や、家の中でどれだけリスクなく移動できるか、そのための環境調整も考えます。手すりなどの効率のいい設置の仕方を、福祉用具業者と話し合ったり、ご本人の能力を活かせる福祉用具を適切に使用できているかを評価しています。

そこから更に、自宅から外へ活動範囲を拡げていく移動手段はどうしたらいいかを考えるということもPTの分野でしょうか。

移動介助も手の添え方ひとつで、その方の能力を活かせるかが変わってくるので、家族や同じく支援に関わる方へのアドバイスもしています。

周囲や環境にアプローチする

本多: 進行性の病気のある70代の男性の方なんです。奥さんと2人暮らし。左官さんで、家から少し離れた小屋で、作業するのが大好きなので、歩い

て小屋まで行く。でもその度に転んでしまう。奥さんは「もう行ったらダメ!」、その状況を奥さんから聞いた主治医も「危ないからやめときなさい」と周りから止められていたんです。リハビリはするけど、転倒をゼロにすることはできない。そこで、奥さんへ、歩いているときの声のかけ方や介助の仕方など関わり方をお伝えしました。主治医にもその方の歩く姿や作業風景の動画を見せたんですね。すと「こんなに動けるんだ!」とびっくりされて。

しばらくして、ご本人から「先生からもう行くなって言われてたけど、気を付けて行ってくださいって言われたよ」と報告を受けました。奥さんも「行くのはもう仕方ない。転ばないように気を付けてあげないとね。」と、その方を取り巻く周囲の対応が変わっていった、結果、その方らしい生活へ繋がっていったということがありました。

作業療法士って??

石本: 作業療法士（以下、OT）は、その方に残された機能や体の状態で、どうしたらその方の望む活動、生活ができるのかを一番に考えます。

OTは食事や排せつなどのセルフケア、家事、仕事、趣味など生活行為全般を「作業」と捉えています。その方に合った「作業」を獲得するために、自助具や福祉用具の活用、環境調整や練習プログラムなどを考えていきます。OTも運動など身体のリハビリを行います。生活行為全般に対するアプローチを得意としているんですよ。

障害とも折り合いをつけながら、自分らしさを取り戻す。いろんな視点から、ご本人の望む生活をかなえられるよう支援しています。

普段の何気ない一言を手掛かりに

石本: 脳梗塞後、左片麻痺の方で、家に閉じこもっていた方がいました。ある日「パチンコに行きたい」と言われたんです。

その一言から「どうしたら行けるようになりますかね」と一緒に考えるようになって、バスの乗り降りを練習し、バスで行けるようになりました。さらに今度は「パチンコに行くお金がないな」という一言から「じゃあ、お金はどうしましょうか」



作業療法士
石本 昭仁 さん
医療法人 和光会
介護老人保健施設 恵仁荘

「ちょっと働いてみたいな」と。そこで、今のその方の能力から就労移行支援事業所からステップアップしていきましようということで、事業所に通われるようになりました。事業所の方にはその方のできることを情報提供し、活かしてもらうようにしました。

半年後に、ケアマネジャーに様子を伺うと、通う日を増やして、職人気質の方だったので職員の方にも指導したりと、すごく生き生きとしてますよと聞きました。生きがいを取り戻されたんだなと、嬉しかったですね。



言語聴覚士

山田 慧さん

医療法人 祥仁会
西諫早病院 訪問リハビリ

🎤 言語聴覚士って??

山田：言語聴覚士（以下、ST）は、ことばによるコミュニケーションや、耳の聞こえを専門としています。発声・発音の器官について専門的な知識を持ってるところから、近年は飲み込みについての相談が多くなっています。

誤嚥性肺炎とか、オーラルフレイルという言葉が認知されてきて、最後まで食べたい物を口から食べるということに関心が高まっているので、相談も増えています。

失語症の方もうまく話せないから人に会いたくない、引きこもってしまうという状況につながりやすいです。なので、ご自宅で実際に家族とのコミュニケーションの取り方をアドバイスしたり、一緒に買い物に行って、店員の方への伝え方など、実際にその場面で練習して自信をつけてもらう。そこが訪問リハの役割として大きいと思いますね。

あきらめない。可能性を探る。

山田：私が訪問リハに携わるようになって間もないところに担当した要介護5の利用者さんで、口から食べると誤嚥するからもう食べてはいけないと言われ、胃ろうを作られていた方がいました。その方は大好きなウナギをもう1度食べたいという思いがありました。そこで、歯科の先生ともう1回、口の状態、飲み込みなど緻密に評価して、リハビリもして。結果、ウナギをまた食べることができて、すごく喜ばれたんですね。もちろん歯科の先生だけでなく、支援者がチーム一丸となって取り組んだケースでした。自分の礎になっています。

人生の最期にある方たちは「もう一度食べたい」という想いをよく話されます。「食べちゃダメ」じゃなくて、どうしたら食べられるかをご家族や多職種との連携で探っていくのも大事ななと思います。

理学療法士

Physical Therapist(PT)

ケガや病気などで身体に障害のある人や障害の発生が予測される人に対して、基本動作能力の回復や維持、および障害の悪化の予防を目的に、運動療法や物理療法などを用いて、自立した日常生活が送れるよう支援する医学的リハビリテーションの専門職

作業療法士

Occupational Therapist(OT)

障害のある人が、その人その人の状態と折り合いをつけながら、生き活きとした生活を送れるよう仕事、遊び、日常的な生活など、活動(作業)をとおして、こころとからだを元気にするリハビリテーションの専門家

言語聴覚士

Speech Therapist(ST)

言語障害（失語症や構音障害）、聴覚障害など、ことばによるコミュニケーションに問題がある方に専門的サービスを提供し、自分らしい生活を構築できるよう支援する専門職。

摂食・嚥下の問題にも専門的に対応する。



🎤 地域包括ケアシステムの中での 訪問リハの役割ってなんでしょう??

山田：セラピストは生活機能の部分それぞれの専門性で評価することを得意としています。その際、ICFの生活機能モデルを念頭において、その人の生活全体を捉えて、目標を定めるということを私たちは大事にしています。

地域包括ケアシステムにおいては多職種協働、連携が必要です。多職種間の共通のものさしとしてICFで、その人らしさをイメージするというのができればいいなと思いますね。

石本：多職種間でもICFという概念を共通認識として持ってコミュニケーションをとると、目指す方向性が見えて、意識の共有、課題の共有ができるのかなと思いますね。その人らしさを共有できるように、私たち訪問リハは、他職種にもわかりやすい言葉で、具体的に伝えることを心掛けて、連携を図っていきなと思います。

本多：理学療法・作業療法・言語療法は専門職しかできないけど、リハビリテーションの概念に基づいたケアは誰でも実施することができます。この考え方が地域にも広がっていくといいですね。

山田：地域には目に見えない形で課題を抱えている方もたくさんいます。そういう方にも目が行き届くように、気づいてもらえるように、いろんな職種の方に私たちが地域にいるということをまずは知ってもらいたいですね。そして、みんなで仕組みづくりができればと思います。

本多：最終的にその人がどうしたら地域に参加できるか、社会参加につながるかということが目標になります。

私たちが介入することで、その人らしい生き方などをもう一度捉え直してもらって、受け身ではなく自らの行動に移していけるように支援するのが、私たちの役割だと感じています。

石本：その人を取り囲む地域には専門職だけじゃなくて、自治会長や民生委員さんなど、支えてくれる方はたくさんいらっしゃいます。

最終的に社会参加へと向かうように、そのような方たちと利用者さんをしっかりつなぐ『かけはし』になることも、私たち訪問リハの役割ではないかなと思います。

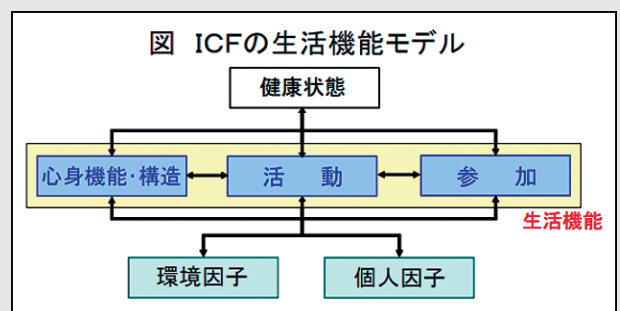
ICFの生活機能モデル(図)

ICF(国際生活機能分類)とは、2001年5月にWHO総会で採択され、その目的は「生きることの全体像を示す共通言語」とされています。

ICFは生活機能の分類とそれに影響する背景因子(環境因子・個人因子)の分類で構成され、さらに生活機能に影響する健康状態を加えたのが「生活機能モデル」です。(下図参照)

生活機能は単独に生存するのではなく、相互に影響を与え合い、また「健康状態」「環境因子」「個人因子」からも影響を受けるため、モデル図では、すべての要素が双方向の矢印で結ばれています。

2002/8/5厚生労働省 「第1回社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会参考資料3」より抜粋



在宅医療・介護関係者研修会を開催しました

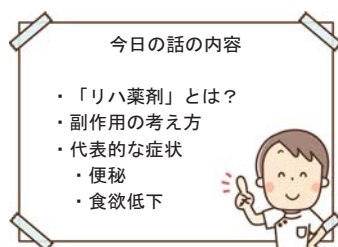
R5.9.28

『リハビリテーション薬剤

生活を支える薬物療法のキホン』

こはく堂薬局の池田理恵先生をお迎えし、研修会を開催しました。

“リハビリテーション薬剤”という言葉は初めて耳にした方も多くいらっしゃったようです。薬によってもたらされる生活機能の低下に対して、どのように対応できるか、詳しくご説明いただきました。在宅で療養される方に対しては“暮らしが先に来る思考回路”で、生活全体をみながら支援を考えていくことが大切だと感じました。



R5.10.23

『諫早市のACPの取組み』

諫早市地域包括ケア推進課の新野課長、林田主任より、ACPの取組みについてお話しいただきました。

参加者からは、「利用者様との関係性ができた時に冊子を紹介することで話の糸口になると思います」とや「諫早市の現状とACPの取組みについて理解できた」、一方で「諫早市がどういったビジョンを持って、ACPに取り組んでいるのかが聞きたかった」などのご意見がありました。



令和5年度 第1回 在宅医療と介護の市民講演会を開催しました

10月14日(土) 小長井文化ホール

小長井文化ホールで市民講演会を開催しました。

初めに、介護保険課より、介護保険サービス利用までの流れの説明や、諫早市が作成したACPの冊子を紹介されました。

山崎先生からは、たくさんの症例をご紹介いただき、在宅医療は多職種がしっかりと連携して、支えていく医療であるご講演いただきました。原先生からはお口の環境と様々な疾患との関わりや定期受診の大切さ、訪問歯科診療について、ご講演いただきました。

森本先生からは、在宅医療における薬剤師の役割や実際の服薬支援について、またかかりつけ薬剤師をもつことをご講演いただきました。

参加された方からは、「とても参考になりました。在宅医療という選択肢があることが分かって良かったです。」などのご意見をいただきました。



Information



令和5年度 諫早市
ACP市民講演会

12月16日(土)
14時から

諫早市高城会館
1階 大研修室

主催：諫早市地域包括ケア推進課

1. 介護保険サービス利用までの流れ

諫早市介護保険課 黒木 敬治

2. 在宅医療について

山崎病院 院長 山崎 善之

3. 人生100年時代～幸せと健康を支えるお口の話～

ヒカリデンタルクリニック 院長 原 美和子

4. 薬剤師も在宅へ訪問します！

そうごう薬局小長井店 森本 裕志



諫早市在宅医療・介護連携支援センター かけはしいさはや

〒854-0061 諫早市宇都町29-1 健康福祉センター内
TEL: 46-3166 FAX: 46-3167
E-mail: isahaya.zaitaku.renkei@iaa.itkeeper.ne.jp
URL: <https://kakehashi-isahaya.com/>

かけはしHP

